

新着図書

野庭すずかけコミュニティハウス
平成31年1月配架

おひとり3冊まで、2週間(新着本は1週間)借りられます。

ことことこーこ

阿川佐和子

結婚十年目に離婚し、老父母の暮らす実家に戻った香子。フードコーディネーターとしての新たな人生を歩み出した矢先、母・琴子に認知症の症状が現れはじめる。弟夫婦は頼りにならず、仕事と介護を両立させようと覚悟を決めるが…。年とともに変わりゆく親子の関係を、ユーモアと人情たっぷりに描き出す！

熱帯

森見登美彦

どうしても読み終わられない本がある。その名も「熱帯」。結末を求めて身悶えするメンバーが集結し、世紀の謎に挑む。この本に惹かれ探し求める作家の森見登美彦氏はある日、奇妙な催し「沈黙読書会」でこの本の秘密を知る女性と出会う。そこで彼女が口にしたセリフ「この本を最後まで読んだ人間はいないんです」この言葉の真意とは？秘密を解き明かすべく集結したメンバー。幻の本をめぐる冒険はいつしか妄想の大海原を駆けめぐり、謎の源流へ！

我ながら呆れるような怪作である

愉楽にて

林真理子

日本とシンガポールを舞台に家柄にも資産にも恵まれた50代の男たちが甘美な情事を重ねていくその果てに一日経連載時から話題沸騰！絢爛たる贅沢な官能美の世界を描く傑作長編。大手医薬品メーカー九代目、久坂隆之は53歳。副会長という役職と途方もない額の資産を与えられた素性正しい大金持ちで、シンガポールと東京を行き来し書物を愛でるように女と情事を重ねる。田口靖彦は老舗製糖会社の三男。子会社社長という飼い殺しの身が急逝した妻の莫大な遺産により一変。家から自由になるために女からの愛を求め、京都で運命の出会いを果たす。時代の波に流されず、優雅で退嬰的な人生をたゆたう男たちが辿り着いたのは—

はつ恋

村山由佳

二度の離婚を経て人生の後半を一人で生きようとしていた小説家のハナ。喪失も手放すことも知ったから辿り着いた最後の恋。「心の栄養」(74歳)「ドキドキする」(62歳)ハルメク連載中、幅広い世代から熱い支持！人生における実りの秋、”最後の恋”を描く恋愛文学の至芸。作家デビュー25周年記念作品。

フーガはユーガ

伊坂幸太郎

あらすじは秘密、ヒントを少し。双子／誕生日／瞬間移動 1年ぶりの新作は、ちょっと不思議で、なんだか切ない。

救済

長岡弘樹

1966年ひのえうまの同じ日に生まれた留津とルツ。「いつかは通る道」を見失った世代の女性たちのゆくてには無数の岐路があり、選択がなされる。選ぶ。判断する。突き進む。後悔する。また選ぶ。進学、就職、仕事か結婚か、子供を生むか…そのとき、選んだ道のすぐそばを歩いているのは、誰なのか。少女から50歳を迎えるまでの恋愛と結婚が、ふたりの人生にもたらしたものと、はたして一日経新聞夕刊連載、待望の単行本化。

アディオス！ジャパン

—日本はなぜ凋落したのか

真山仁

「ハゲタカ」の著者、初の社会派エッセイ。日本は終わった国なのか。週刊エコノミストの人気連載が待望の書籍化。「外からの視点でニッポンを見つめてみる」「ビバ！富士山」「ワインは語る」「さらば築地のはずが」「地熱は日本を救えるか」「銀座でお金の重みを考える」「韓国は近くて遠いのか」「沖縄は可哀そうな場所なのか」「ニッポンの“国技”野球の底力」「トランプ大統領は、民主主義の申し子なのか」「言葉とは裏腹の平成時代」「名門・東芝は何を失ったのか」他

針と糸

小川糸

ベルリンで学んだゆとりある生活の知恵と工夫。母親の死で受け入れた辛い過去・木の葉のように気ままに、生きることが心から楽しくなるエッセイ集。
第1章 日曜日の静けさ(直感；自分だけのルール他)
第3章 お金をかけずに幸せになる(物欲が消える他)
第4章 わが家の味(文化鍋でお米を炊く；おせちと願い事他) 他